

はじめに

2000年ころから、新聞紙上に「戦後第四回目の少年犯罪のピーク期」ということばが踊るようになりました。これに気づいた方も多と思います。

この「第四次少年犯罪多発期」の特徴は、何でしょうか。私は、以下の5点にあると考えています。

- ① 窃盗などの軽犯罪の増加
- ② 性非行・性犯罪の増加
- ③ 女子非行・女子犯罪の増加
- ④ 異常犯罪・凶悪犯罪の増加
- ⑤ 薬物乱用

そして、この五つの特徴が、単独で、また複雑に絡み合い重なり合って、現在私たちの前に現れています。それでは最初に、この五つの特徴を一つひとつ見ていくことを通して、「第四次少年犯罪多発期」の背景としての、私たちの生きる現代日本社会が抱える問題とその原因を見てみます。

① 少年による窃盗などの軽犯罪の増加

今回の「第四次少年犯罪多発期」の第一番目の特徴は、少年による窃盗などの軽犯罪の増加です。特に窃盗は、摘発されないものも含めれば、異常に増えています。私は、この背景には、二つつの理由があると考えています。

一つ目の理由として、これは子どもだけの問題ではないのですが、大人まで含めて、規範意識が希薄になっていることをあげることができます。たとえば、幼児期から父親が、スピード違反等の交通法規違反を、捕まらなければいいと繰り返すことを見て育った子どもはどうなるのでしょうか。人のものを盗っても捕まらなければいいと考えはしないでしょうか。今、私たちの社会で、きちんと正義や善を日々意識し、それを日々貫いて生きている大人がどれだけいるのでしょうか。

私が、教員となった1980年代に生徒指導担当の教員の間でよく言われたことばがあります。それは、「7:2:1」ということばです。これは、「どんな荒れた学校でも、生徒の7割は、何の問題もなく、特に教員が手をかけなくてもきちんと成長していく。それだけ、日本の家庭や地域、学校などの社会の教育力は優れている、しかし、1割の生徒は、劣悪な家庭環境やそれまでの心の傷などで何らかの非行の芽をすでに持っている、2割の生徒は、ふらふらとしている。私たち生徒指導の教員は、まずはその2割の生徒をきちんと指導し、更生させ、1割の非行的要素を持つ生徒に対しては、児童相談所や福祉事務所、司法機関や警察と連携して、その更生にあたる」という意味で使われていました。

ところが、1990年代後半からは、私たち生徒指導担当の教員の間では、「3:4:3」ということばがささやかれ始めました。これは、現在の私たちの社会が持つ教育力では、家庭や

学校が特に手をかけなくても、きちんと育つ生徒は3割にすぎない、その一方で、もうすでに何らかの悪や非行に染まり、またその芽を持っている生徒は3割も存在し、その中間の4割の生徒は、どちらともつかずふらふらしており、何らかのきっかけで、どちらにもなりうるということを意味しています。

しかも、一部の日本の教育や社会の現状を悲観的に考えている教員は、「3:7」とまで言っています。もう中間のふらふらしている4割は存在せず、7割が問題を持っているということです。

私も、多くの女子高校生や女子中学生たちが、あのルーズソックスにミニスカート、茶髪に化粧という姿で学校へと通う姿を見ると、このことばを否定できません。たかが服装ですが、あの姿には、子どもたちの異性に対する関心の強さや、子どもたちが「学ぶ」ことから「遊ぶ」ことへと大切な青春の生き方の目標を変えていることが実感できます。しかし、私は、彼らを責めようとは思いません。悪いのは、正しい人としての生き方を、きちんと実践をともなって、彼らに示していない、私たち大人自身に、また私たちの社会全体にあると考えています。

二つ目の理由としては、ものを考えることのできない子どもたちが増えていることをあげることができます。

今、日本の多くの子どもたちは、自分できちんとものを考えるゆとりを与えられずに育ってきます。家でも、学校でも、「ああしなさい」、「こうしなさい」という指示に従って、いわれるままに「受け身」で生きています。これは、遊びでも同様です。テレビにしてもゲームにしても、すべて「受け身」で、楽しまされているにすぎません。そこには、創造性も、自分で考えることも必要とされていません。

このように育てられた子どもたちも、当然のことながら、自分自身で考え行動しなくてはならないときがきます。そのとき彼らはどうするのでしょうか。自分の力で考え行動することのできない彼らは、まわりを見渡します。そして、そのことが「善」であるか「悪」であるかを問うこともなくまわりの仲間たちと同じことをしていきます。「万引き」「買春されること」「薬物乱用」など、ただ「みんながやっているから」というだけの理由で、繰り返し、そして悪の道にはまっています。

子ども時代に、自分自身で物事をきちんと考えることができるように育てられてこなかった彼らには、そのことが、社会や他者、両親にたいしてどれだけ迷惑をかけ、自分自身の人生をどのようにゆがめてしまうかを考えることができないのです。まさにここに、私は、現在の窃盗の急増、薬物乱用をはじめとする少年非行や犯罪、このところ続く「17歳の凶行」などの背景を見ます。

② 性非行・性犯罪の増加

現在、少年による下着泥棒、幼児猥褻、のぞき、「買春される」などの性非行・性犯罪が急増しています。

私は、性非行が急増していることは、当たり前のことのように思えます。私は、数年前あるテレビ局の番組のコメンテーターとして出演することになり、その中で、子どもたちが触れ、読んでいるさまざまな漫画雑誌を読まなくてはならないことになりました。小学

校の低学年の児童たちが日常的に読んでいるものから、高校生たちが読んでいるものまで、日本で販売されている大半の漫画雑誌に目を通しました。そして、2つの意味で愕然としました。

一つは、日本の漫画の、当然すべてではありませんが、多くのものの、性にかんする描写の危うさです。小学校低学年の生徒が読んでいるものですら、下着が見えたり胸が見えたりするカットが入っています。また、キスシーンも……。小学校高学年の児童の読んでいるものでは、一部に性描写がでてきます。ただし、下半身は枠外、胸はでてきます。これが、たぶん出版社の自己規制なのでしょう。

そして、中学生以上が読んでいるものでは、性描写そのものが下半身を含めて、ただしぼかしてはいますが、でてきます。そして、その中で語られるのは、好きになったらキスをしてペッチャクをして、そしてセックスをする。しかも、避妊や性感染症予防のためのコンドームの使用など全くと言っていいほど語られていません。このような本に、小学校低学年から触れて育った子どもたちは、性をどう考えるのでしょうか。性を、単なる遊びの一種、あるいは男女間のごく普通の日常的愛情表現と捉えてしまうのではないのでしょうか。

しかし、性とはそんなに軽いものなのでしょうか。私は、そうは思いません。もっともっと大切にしなければならない、重いものと考えていますし、子どもたちにもそう理解して欲しいと考えています。これは、私たち教員や親の心からの思いではないのでしょうか。

もう一つ、私が愕然としたのは、これらの漫画の中に露骨に女性蔑視の考え方があることです。漫画の中で、多くの場合、「男の子を好きになったら、男の子に言われたことを、何でもハイと言って聞くのが、いい女。キスしたいと言われたら目をつぶって唇を差し出す。裸を見たいと言われたら、洋服を脱ぐ。セックスしたいと言われれば、セックスする。しかも、キスしても、裸になっても、セックスしても喜ぶ」。このような女性が、男にとってすばらしい、また愛される女性として描かれています。

現在は、ジェンダーフリーの時代と呼ばれつつあります。つまり、男女が性の差を超えて、同じ人間として互いに尊重しあい、家庭や職場、社会において助け合って生きていこうという時代です。このような時代に、このような考え方が、公然と、子どもたちの間に広められていいのでしょうか。「男につくす女こそが、いい女」という古い男尊女卑の考え方が、子どもたちの中に漫画を通して広がっていくことに、私は恐怖を感じました。

それでは、このような事態に対抗すべき家庭や学校での性教育は、いったいどうなっているのでしょうか。戦後、長い間、性教育は純潔教育という形で行われてきました。子どもたちが生きていく社会には、確かにエッチなものや悪いものは存在する。しかし、そんなものは見ないで、美しいもの純粋なものだけを見て、すくすく育ちなさい、といった教育が、家庭でも学校でも行われてきました。今現在ですら、このような教育を行っている家庭や学校は、多く存在します。これでいいのでしょうか。私は、そうは思いません。

現在のようにインターネット等が普及した高度情報化社会において、情報にふたをすることが、また情報を制限することができるのでしょうか。今や多くの子どもたちは、いとも簡単にインターネットを行います。そして、そこで触れる情報の中には、エッチなもの悪いものが普通に存在します。これらを制限することなど不可能です。

私は、むしろ今こそ家庭や学校でしなければならないことは、有害なものを含めてさま

ざまな漫画やインターネットのホームページ、あるいは極端ですがアダルト的なビデオまでも、子どもたちとともに見、そして、親子・生徒教員の間で、これらのどこに間違いがあるのか、そして、どこにどのような問題があるのかを、ともに考え、子どもたち自身が、それらの情報を有用なもの無用なもの、正しいもの間違っただけのものときちんと取捨選択できるように育てることなのではないでしょうか。

また、現在教育の現場で主流となりつつあるもう一つの性教育があります。それは、青少年の性感染症予防や妊娠中絶の根絶のために、避妊法を教える教育です。確かに、現在のように性感染症が子どもたちの間に広まり、子どもたちの妊娠中絶が増えている現状では、それらの問題に対する最も即効性のある有効な対処法は、コンドームの使用法等を教えることを通しての避妊法・性感染症予防法を子どもたちにきちんと理解させることです。

しかし、本来は、この対処法の指導が必要ないように私たち学校現場や家庭では、「男女の営みとしての性とはどうあるべきなのか、愛と性とのあるべき関係、性を人生の中でどう捉え、どう生きていくべきなのか」等をきちんと子どもたちに伝え、子どもたち自身が、互いを尊重しあい守り、愛を時間をかけて育て、性を大切にすることを育まなくてはならないのではないのでしょうか。

また、私は性犯罪として考えていますが、「援助交際」などというとんでもない名前をつけられた「買春される」が異常に増えてきています。新聞報道でも明らかですが、女子高校生だけではなく、女子中学生の間にまで広がってきています。私は、週に何回は、「夜回り」とマスコミや子どもたちに呼ばれている、深夜の町のパトロールを、12年間行ってきました。夜11時ごろに夜の町に出て、ピンクビラや立て看板を取り去りながら、女子中学生や女子高校生に家に帰るように指導し、終電が終われば、ホテル街に立ち、中高年の男性とホテルに入ろうとする女子中学生や女子高校生を保護してきました。

今までに私がこのケースで保護した子どもは、300人以上に及びます。みなさんは、彼女たちがなぜからだを買われるのか、考えたことがありますか。多分ほとんどの人は、お金のためと考えていることと思います。私も、彼女たちから直に話を聞くまではそう思っていました。確かに、2回目、3回目の「買春される」からは、ほとんどの子どもたちがお金のためにと答えます。

しかし、1回目は、違うというのです。私が関わった買春された子どもたちの70%以上が、優しくしてもらえたからと答えています。私は、このことばを聞いたときに、からだは震え、哀しくなるとともに、昼の世界で生きる親たちや教員たちに対して憎しみすら覚えました。買春される子どもたちの多くは、昼の世界を自分たちにとって阻害された住みにくい世界と考えています。そして、いつも叱られ自分を評価してもらえない辛く哀しい世界と考えています。そのため、夜の町で、彼女たちのからだを狙う中高年の男たちに、「君ってきれいだね。君って素敵だね、何か飲みたいものは？食べたいものは？どこか行きたいところは？何か欲しいものは・・・」と甘い言葉をかけられれば、そのことばに救いを求めてしまうのではないのでしょうか。

③ 女子非行・女子犯罪の増加

私の経験からいって、男子と女子では、非行への進み方が明らかに異なります。男子の場合は、最初に必ず非行に入る兆候としてのサインがあります。これは、ほとんどの場合、反抗という形で現れてきます。なんだ、この子は急にいろいろなことに突っかかってくるなどと思ったら、それは、その子が非行への第一歩を踏み出したサインです。そして、少しずつ、しかし確実に崩れていきます。たとえば、髪の色でも、一度に金髪にするのではなく、まず最初は少し色を付けてみて、周りの反応を見て、またより明るく染めていく。眉毛を細くするにしても、少しずつ周りを気にしながら細くしていきます。ですから、男子の場合、非行に入りそうになっていることも、捉えやすく、その程度も、会話や格好から掴むことができます。そして、その時の状況把握がしやすいですから、比較的対処しやすいケースが多いと言えます。

しかし、女子の場合はまったく異なります。はじめに、一挙に崩れます。髪の色でも、服装でも、言葉遣いでも、性でも、ある日突然、まったく違う人格となって生まれ変わってしまったように極端に変化し、その瞬間から、非行へと深く沈んでいきます。これは、男女の性質の違いからきているように、私には思えます。女子の場合は、我慢して我慢して、押さえて押さえて何とかいい子でいようとする。その我慢が長く大きければ大きいほど、押さえきれなくなったときの変化は大きく、一挙に崩れていく。私はこう考えています。

また、このように見ることもできます。女子の場合、男子より自己防衛本能が強く、非行への抑制となる壁、自分を大切にしたいという思いが作る壁が、男子の場合に比べて高く、非行へと簡単に入ることは少ないのですが、一端その壁を越してしまうと、その次に待ち受けているのは、男子の場合のような、なだらかな下り坂ではなく、急な断崖絶壁で一挙に落ちるところまで落ちてしまう。たとえば、性についても、女子の場合、最初の第一回目の性行為は、非常に抵抗感もありなかなか踏み出しにくいものですが、一度体験してしまうと、次からは一挙にその抵抗感が消えてしまいます。窃盗の場合でも、最初は誘われても、恐怖感や罪悪感を感じなかなか実際の行動にまでは進みにくいのですが、一度みんなでやってしまうと、次からはまるで遊び感覚で繰り返してしまいます。

実は、今少女たちについて語ったことは、現在そのまま成人の女性に対しても当てはまります。今確かに急増し、大きな社会問題となっているのは、少女たちの非行・犯罪ですが、成人女性の犯罪も確実に増加しています。

私は、この12年間の「夜回り」を通して、夜の町をさまよう多くの少女たちとふれあいました。彼女たちに共通しているのは、「自己肯定感」の希薄さです。言い換えれば、自信のなさです。素顔の自分に自信がないために、顔を厚化粧する少女。また、異様なコスチュームで自らの自信のなさを逆に発散させる少女……。つかのまの愛や優しさを求めて、彼女たちの肉体をねらう大人たちの罠にはまってしまう少女……。寂しさを携帯電話のメールでの不特定多数の「メル友」とのメールのやりとりで紛らわし、あげくには実際に会って性的被害を受けてしまう少女……。私の元には、このような少女たちからの救いを求めるメールが、毎日たくさん届きます。

特にこのところ多い少女からの相談は、「メル友」と実際に会うことになり、会って性的関係を持ち、その際に写真を撮られ、関係の継続を強要されたり、ひどい場合には相手が暴力団関係者で売春を強要されているケースです。春休みで自由や時間が多く、昼に

会うならば安心という気持ちで出かけ、被害に遭っています。これらの相談は、東京や大阪、横浜などの都市部からの相談だけでなく、新潟、秋田、福井、島根など全国各地から相談があります。またひどいケースでは、その性的関係から性感染症になってしまい、あるいは妊娠してしまい、一人で苦しみ死を考えている少女もいます。これらのケースでは、私は、親にそのことをきちんと話すことを指導し、そして親との間に立ち、警察に相談するという指導を行っています。自分のしたことはきちんと認めさせ、反省させ、そして、受けた不当な被害に対してはきちんと社会的にも法的にも戦わせる指導が基本だと考えています。ただし、必ず側には立ち続け守り続けることが必要です。

私は、このような少女による非行・犯罪を抑制することは、そんなに難しくないと考えています。それには、少女たちが持っている非行への壁を、できるだけ高くしてやり、非行への第一歩のハードルを持ち上げてやればいいのです。言い換えれば、自分に自信を持たせ、自分をきちんと大切にできるよう育てればいいのです。どうしたら、この自信は育つのでしょうか。私が、親たちを対象とした講演会で必ず親たちに言うことを書いてみます。この中に答えはあります。

「申し訳ありませんが、お母さん方、みなさんをちょっと責めてみましょう。みなさんのほとんどの方は、子どもの母親であると同時に、妻であると思います。もし、みなさんが夫から、一生懸命作った夕ご飯を、こんなもの食べられるか、俺は外で食べてくる。本当にお前みたいな女と結婚して、俺は世界一不幸だと毎日言われ続けたらどうなりますか。非行中年になりませんか。

ところが、もし夫から、お前の作った夕ご飯は最高だよ。お前がいるから俺がいる。お前なしの人生なんて、星のない夜空みたいなものだと毎日言われたらどうですか。ビールの一本も出したくなり、いい妻になろうとますます努力していくのではないですか。

みなさんの母親としての今のあり方は、このどちらの夫の姿なのでしょう。もし最初の夫のように、子どもたちに日々小言を繰り返し、叱ってばかりだとしたならば、子どもたちはその小言一つ一つによって非行へと追いやられています。しかし、もし後者の夫のように、日々子どもたちのいいところ、いい行いを見つけ、それをきちんと評価し誉め続けていけば、確実に子どもたちは日々非行から遠ざかっています。

子どもたちは、受けた愛の数が多ければ多いほど、非行から遠ざかり、また受けた愛が深ければ深いほど非行に入ったとしても、その傷は浅いのです」

それでは、私たちの学校は私たち教師自身はどうなのでしょう。少女いや子どもたちを夜の世界や非行の世界へと追い込んでいないのでしょうか。私は、教師を対象とした講演でよく以下のことをいいます。

「みなさん、ぜひ今までの教師生活を振り返ってください。みなさんは教師生活の中で、生徒を褒めた数と叱った数とどちらが多いですか。ぜひ叱った数の方が多い先生は考えてください。もし皆さんが日々先輩教員や管理職から叱責されつづけたらどうしますか。心の優しい人なら、自信をなくし、心を病みそして学校を去ることになってしまいませんか。また心が比較的強い人の場合は、居直りその鬱憤を生徒に向けてあるいは家族に向けて爆発させてしまいませんか。

これは、生徒たちも同じです。学校で日々、おまえはこんなこともわからないのか、何をしてるんだ、そんなことをしてたら留年するぞ、成績が下がるぞと言われ続けたらどう

なるのでしょうか。その一言一言が生徒たちを追いつめ、自分はだめな生徒なんだと追い込まれていくのではないでしょう。そして、そんな中でも元気のいい子は仲間を求め夜の世界に飛び出し、非行や暴走に入り、心の繊細で優しい子は、夜の真っ暗な寂しい部屋でカミソリを手にしてリストカットを繰り返し死に向かい、またつかの間の救いを求め、メールや携帯電話の出会い系サイトなどで大人たちの餌食にされています。

生徒たちは、そんなに悪い存在なののでしょうか。これが違うことはみなさんはきっと知っていらっしゃると思います。多分、生徒たちを叱った数の方が多い先生方は、こう言うと思います。確かに生徒たちは一人一人たくさんのいいところを持っている。だからこそ、生徒たちの悪い部分を一つ一つ注意しなおさせることで、もっとよくしたいのだと……。しかし、もしも生徒たちが自分のいいところにまったく付いていなかったならば、叱ることは、大切な生徒たちを追いつめていくことにつながるのではないのでしょうか」

今、少女ばかりではなく、多くの子どもたちが、家庭や学校できちんと評価されないことから、自信を失い、そして自分を大切にできなくなっています。子どもたちには、そんなに悪いところしかないのでしょうか。そんなわけはありません。どんな子どもたちも、大人とは比べようもないほど、すばらしい優しさや素直さ、また明日への可能性の芽を持っています。それなのに、今多くの親や教員たちはそれを育てるところか、潰し摘んでいく。この点さえ、変えることができれば、特に少女の非行・犯罪は激減すると、私は確信しています。

④ 異常犯罪の増加 1

今、「17才問題」で良く話題になりますが、少年たちによる異常犯罪が増えています。みなさんも、新聞等のマスコミを通じて良くご存知だと思います。また、心を痛めていられることと思います。

私はこの何年か、17才で大変な犯罪を犯してしまった一人の少年とともに生きてきました。彼の両親や彼から、彼の生育の歴史を聞いて哀しくなりました。彼は、このような子どもでした。小学校の入学式の日、学校の校門の横にとてもきれいに桜が満開で咲いていたそうです。彼は、その花の数を、一つ・二つと数えはじめたそうです。そしたら、すべてを数えなくなり、母親が何を言ってもそこから動こうとしなかったそうです。結局は、「なにのろのろしてるの」と無理矢理入学式会場に連れて行かれるのですが……。彼の小学校の入学式は、涙でいっぱいだったそうです。

小学校の1年生になって、体育の時間にグラウンドに出ると、足下でアリさんたちが散歩をしていたそうです。彼は、すぐ夢中になり、「アリさん、何を運んでいるんだろう、どこへ行くんだろう」とずっと観察、そこから離れることができず、先生に叱られ無理矢理授業に参加させられたそうです。私は、この子は、すばらしい感性と才能を持った子どもだったんだと思っています。これをうまく育ててあげれば、それこそ日本を代表するような人間になることができたのではないかと……。

しかし、このような行動は、今の社会、特に学校社会では通用しませんし、ほとんどの場合許されません。そして、先生からも、問題児童として扱われ、同じクラスの子どもたちからも、「あんなのろのろしてる子とは、一緒にの班なんかになりたくない」と疎外され、

孤立していきます。そして、小学校3年生から学校に通えなくなります。「不通学」となってしまうのです。(私は、いつも「不登校」ということばを使いません。この登校・下校ということばには、何か学校が高いところにある偉い場所だというような、不快な響きを感じるからです)

人間は、一人で生きることはできません。彼は、この「不通学」から徐々に「引きこもり」状態に陥っていきます。最初は、学校には通えなかったけれど、両親とともに旅行に行ったり、買い物に出たりはできたそうです。しかし、小学校6年生の時に本を買いに一人で出かけたとき、一人の近くに住む同級生に会い、彼から言われた一言、「お前、学校毎日さぼって、いい身分だな」という一言が心に刺さり、まったく家から出ることができなくなりました。両親も、最初は何とか一歩でも外に連れ出そうと、「ゲームを買ってあげるから、好きな歌手のCDを買ってあげるから」と誘ったそうですが、それが逆効果になり、家で暴れ、特に母親にひどい暴力をふるうようになっていったそうです。苦しかったんだと思います。一人でいることの苦しみ、辛さを、最も愛する母親への暴力という形でしか表せなかった苦しみ、考えるだけで辛くなります。

そして、この孤立から来る不安が、大変な犯罪という形で爆発したのが、17才の時でした。実は、子どもたちの成長の流れの中で、この17才前後の時を「疾風・怒濤の時代」とか「第二の誕生期」と言います。つまり、子どもたちが、自身のアイデンティティを形成する、最も不安定で混乱する時期だと言われています。その時に、彼は、最も最悪の形で爆発してしまいました。

今、この「不通学」に陥ってしまう児童・生徒が確実に増え続けています。その一方で、文部科学省や各都道府県の教育委員会、現場の学校は何をしているのでしょうか。私は数年前に、当時の文部省の「無理をして学校にいかせなくてもいい」という内容の発言に、哀しみを覚え、怒りすら感じました。小学校・中学校教育は義務教育です。親たちに、子どもに教育を受けさせる義務があると同時に、国にも、すべての子どもたちに教育を受けさせる義務があります。これは、憲法違反ではないでしょうか。

私は本当は、こう言うべきだったと考えます。すなわち、「無理をして、既存の小学校や中学校に行かなくてもいいけれど、こういう学校もあるよ、こういう場所もある、まずは、自分の居場所をそれらの中から探してみよう」と、既存の学校とは違った、さまざまなタイプの学校や施設を用意し、子どもたちが、他者とともに触れ合い生きることのできる場所を用意すべきだったと考えます。しかし、現在に至るまで、ほとんどそのような学校や施設は作られていません。

小学校や中学校以外に行く場所の、学ぶ場所の用意もせずに、「学校にいかなくていい」と言うことは、その子どもを切り捨てて、「引きこもり」という状況に押しやっていることのように私には思えます。

今日本は、13万人以上の「不通学」児童・生徒と30万人を超える「引きこもり」の人を抱えています。私は、この「不通学」・「引きこもり」の問題は、今後の日本社会に対して、単に労働資本の欠損という問題だけでなく、犯罪や多くの問題になっていくのではと危惧しています。

私は、この「不通学」、「引きこもり」も解決できる問題だと考えています。私たちは、現代社会で画一的な時間に支配されて生活しています。つまり、時計が刻む時間に従い、

一日をその時間に追われて生活しています。ほとんどの大人の場合、これを当然として、その時間に追われながらも適応していますが、時間とは、すべての人間にとって同じ早さで進んでいくものなのでしょうか。

実は、私たちは、この時計が刻む客観的な時間(物理的時間とも呼ばれます)とは別に、一人一人が主観的時間(生理的時間と言った方がわかりやすいかもしれません)を持っています。みなさんは、叱られたり嫌なことがあったりしたとき、時の流れがとても遅く感じ、早くこんな状況から抜け出したいと考えたことはありませんか。その一方で、楽しく幸せで何かに夢中になったとき、ふと気づくと、何時間もの時間が過ぎていた。このような経験をしたことはありませんか。これが、主観的時間です。この主観的時間は、一人一人の人間のおかれた状況によっても早さが変わりますし、一人一人の人間によっても、また同じ人間でも、年齢によって成長によって異なります。子どもは子どもの時計を持っていますし、高齢者には高齢者の時計があります。時代の最先端を生きるビジネスマンには、さぞや秒針の早い時計があることでしょう。また、私のように、年や季節や時間の感覚を持つこともできず、はっと気づくと、1年が過ぎていたり、季節が変わっていき、日々、年々をひたすら生き抜いている人もいます。

本来、家庭や学校では、この子どもたちが一人ひとり異なる、また年齢によって異なる主観的時間を尊重しながら、子どもたちを育てて行かなくてはなりません。しかし、現実はどうでしょうか。家庭で親は親の時間を子どもに押しつけ、学校では、一人ひとりの子どもによって時間の流れの速さを変えず、画一的に共通の時間を押しつけているのではないのでしょうか。

私は、家庭や学校で、特に学校で、子どもたちを画一的に扱うのではなく、一人ひとりの子どもに応じて、子どもの目の高さで、子どもたち一人ひとりにあった時間の流れにあわせて生きる大人が増えれば、この問題に対する大きな解決の糸口となると確信しています。

実は、私が、定時制高校の教員を続けている大きな理由の一つは、一人ひとりの子どもたちにあった時間の流れの設定が、とてもしやすく、丁寧にゆとりを持って一人ひとりの子どもたちと触れ合うことができるからです。実際に、小・中学校時代に「不通学」だった多くの子どもたちが、定時制のゆったりとした時の流れの中で、学校に戻り、明日を求めて学んでいます。私にとって、最も幸せな教育の現場です。私の前任校の定時制高校では入学者のほぼ7割が中学校時「不通学」の生徒たちでした。その多くが高校に定着し、それどころか部活動や生徒会活動を活発に行う生徒となっていました。

また、私は「不通学」の家への家庭訪問を頻繁に行っています。しかもご両親の了解を得た上で、深夜に家庭訪問をしています。「不通学」の生徒の大半は、生活習慣が夜型へと移行し、夜起きていて悩み苦しむ、朝から昼は寝ているという生活をしています。この子どもたちの元に、夜11時過ぎに家庭訪問をします。そして、午前2時頃まで側でただ本を読んだりして過ごします。自分からあまり話しかけることはせず、彼らからのことばを待ちます。過去の虐めなどから人間不信や対人恐怖に陥って「不通学」になっている生徒の多くは、この方法で学校に戻りました。

ただし、私は無造作に体当たりでこの「不通学」や「引きこもり」の問題に関わっているわけではありません。どのケースでも、信頼できる精神科医と連携しその力を借りて取

り組んでいます。実は今、精神科医を各学校に校医として設置しようとする動きがあります。この問題の解決に向けて、ぜひ実施してもらいたいものです。

⑤ 薬物乱用

1998年1月に政府から「第3次覚せい剤乱用期」に日本が突入したという宣言が出されてから、すでに7年の月日がたとうとしています。政府は、この「第3次覚せい剤乱用期」を、日本の存亡に関わる重要な問題と捕らえ、すでに1997年には、当時の総理府に「薬物乱用対策推進本部」を設置し、「薬物乱用防止5カ年戦略」を発表していました。これは現在も継続しています。

なぜ、そのように政府は迅速に動いたのでしょうか。それは、今回の薬物乱用の中心が、私たちの社会の明日を担う中高生を中心とする十代の子どもたちだったからです。専門家の間では、大人の薬物乱用は点でありさほど広がらない、しかし、子どもたちの薬物乱用は、子どもたちが常に集団で動く場合が多いため、面として「伝染病」のように広がるから怖いとよく言われます。子どもたちのあるグループの一人がシンナーや覚せい剤などの薬物乱用を始めるとあっという間にそのグループ全体が汚染されていきます。

私の元に先日、一人の高校2年生の少女から相談が入りました。彼女は、自分の高校で私の講演を聞き、泣きながらその日の夜、私の学校に電話をしてくれました。彼女は、電話の向こうで泣きながら、話をしてくれました。彼女の彼氏は、暴力団の構成員で、覚せい剤の売人だったそうです。彼女は、夜の町で彼と知り合い、すぐに彼によって覚せい剤を教えられ、覚せい剤代のために「買春される」を強制されたそうです。そのうちに、友人にも覚せい剤を勧めるようにいわれ、大切な友だち4人に勧め、彼女たちも、今は、自分の覚せい剤代のために、「買春される」をしているという内容でした。彼女は、自分のしてしまったことに打ちのめされていました。私は、彼女たちを保護するとともに、警察に通報し、彼を逮捕してもらいました。彼女は、今、自分のしてしまったことの重さに苦しんでいます。このように、若者たちの間では、あっという間に薬物は広がっていきます。

それでは、政府はこの問題に対してどのように動いたのでしょうか。これは「薬物乱用防止5カ年戦略」を見れば明らかです。その「目標1」には、「中・高校生を中心に薬物乱用の危険性を啓発し、青少年の薬物乱用傾向を阻止する」が掲げられています。決して、密売や密輸を根絶することによって薬物乱用を阻止するではありません。これは、何を意味するのでしょうか。日本が「薬物を乱用できない社会」から、欧米型の「薬物をいつでも手に入れ乱用できる社会」へと移行してしまいつつあることを意味しています。つまり、私たちの大切な生徒たちの何割かが、人生の中で薬物と出会ってしまう社会になってしまったということです。

現在、私たち専門家の間では、今十代の子どもたちの五割は、これからの人生で、身近で薬物について見聞きし、四人に一人は薬物の使用を誘われるだろうと言われています。また生涯体験率は2.6%まできているという専門家もいます。私も、身近な子どもたちからの情報をもとに考えて、この数字は、妥当なものだと考えています。ただし、都市部ではこれより遙かに高率になるでしょうが。

それにもかかわらず、多くの人の意識の中では、この薬物問題は、各関係取締機関がき

ちんと、その密輸や密売を取り締まるべき問題で、自分たちの問題ではないと考えられています。現状ではこれが不可能であることは、だれもがすぐ理解できることです。もうすでに、日本には、専門家による推定で一年間に40〜70トン、末端価格で8000億円から1兆4000億円相当の覚せい剤が、日々絶え間なく密輸されています。合成麻薬のMDMAについても、100万錠を超える量の密輸が行われているだろうと押収量から推測されています。そして、子どもたちのごく身近にいくらでも密売されています。私は、私の住む神奈川県的主要な駅周辺でも、また講演で訪れた地方都市でも、必ず「夜回り」、言い換えれば深夜のパトロールを行います。そして、子どもたちと話をしますが、必ずといっていいほど彼らの多くが覚せい剤の入手方法や入手できる場所を知っています。それとともに、薬物を乱用する友人がいると話をしてくれます。そうである以上、関係機関には、さらに取り締まりに努力してもらうとして、教育の現場でも、子どもたちに、薬物の本当の姿を知らせ、誘われても自らそれを断ることのできる子どもを育てることが急務です。

私は、今回の「第四次少年犯罪多発期」の五つの問題の中で、この薬物乱用が最も重大な問題であると考えています。それは、薬物の乱用は、その薬物がどんなものであれ、一回一回の乱用が、乱用する者の脳や神経細胞に直接作用し、そして一生治癒することのない傷を残すからです。脳や、神経細胞は、一度壊れてしまえば、まず元に戻すことのできないものです。ここに、この問題の重要性があります。

私が3年前に関わった一人の中学3年生の女子生徒は、たった3ヶ月の有機溶剤の乱用とたった5回の覚せい剤の乱用で、大脳新皮質の8%が溶けてしまうという悲惨な状況になってしまいました。この少女は、残念ながら私の15人目の亡くした子どもとなってしまいました。

私の経験から見て、1994年頃から、私の大切な子どもたちの間に覚せい剤や大麻が流れ込み始めました。彼ら、特に高校生は、薬物の密売を行う暴力団にとっては、最高の顧客でした。なぜなら、高校生の制服を着た警察官などいるわけもなく、友人関係が横に広くつながる若者層は、黙っていても薬物を広めていってくれるからです。

今回の汚染期の特徴は、まさに、中学生や高校生などの子どもたちへの覚せい剤や大麻などの薬物の蔓延です。今、私たちにとっても、私たちの社会にとっても大切な多くの子どもたちが、薬物の甘い罠にはまり、その将来の可能性と未来を閉ざしていつています。このような現状にも関わらず、家庭も学校も、言い換えれば社会全体も、問題意識が希薄であり、きちんとした対応ができていません。私の周りを見渡しても、大半の親たちや教員たちは、限られた一部地域の一部の子どもたちの問題であると考えています。それどころか、「寝た子を起こすな」という論理で、薬物についての正確な知識や現在の状態を語ることすら拒む人たちも存在します。「寝た子は必ず起きる」し、今や薬物について、「寝た子はいない」にも関わらずです。問題は、どのようにしてきちんと起こしてやるか、そして、自ら薬物の乱用を拒否できる強い意志を育むかなのです。

今回の第三次覚せい剤乱用期は、私の体験から見て、現在までを三つの段階に分けることができます。

第一段階は、1994年ごろにはじまりました。この年は、ポケットベルや携帯電話が急速に高校生をはじめとする子どもたちの間に広まっていった時期です。当時、ポケットベルにメッセージを入れたり、携帯電話に連絡をすることは、多額の電話料がかかりまし

た。そのため、偽造テレホンカードが、子どもたちの間で使用されるようになりました。当時、この偽造テレホンカードは、繁華街や駅周辺で、西アジア系の不法滞在外国人によって、三枚千円程度で密売されていました。この外国人たちが、偽造テレホンカードとともに覚せい剤や大麻を売り始めました。そして、「やせ薬」「S」「スピード」などと名前を変えて、子どもたちの間へと薬物が流入していったのです。

第二段階は、1996年頃からはじまりました。薬物を覚えその魔力にとりつかれた子どもたちは、それを定期的に乱用するためには、多額の金を必要としました。女子の場合は、年齢を偽り、ファッションヘルスなどの風俗の仕事をして金を稼いだり、「援助交際」と称する「買春される」で金を手に入れました。実際に、この時期に神奈川県・静岡県・東京都など多くの都道府県では、このケースで多くの女子高生が警察によって摘発されています。

ところが、このような手段で、安易に多額の金を手に入れることのできない男子の場合は、自らが「売人」となって行きました。自らが、小学校や中学校時代を過ごし居住している地域に戻り、後輩である中学生や仲間達に薬物を売ったり、自らが通学する学校内で仲間へと薬物を売る「売人」となっていきました。自らが乱用する薬物を手に入れるための金を手に入れるために。こうして、薬物は、地域社会や学校内へと広がって行きました。子どもたちの場合、薬物乱用は、非常に伝染力の強い伝染病です。子どもたちは、多くの子どもたちは多くの場合集団を作り、集団で行動します。そこに、薬物が流入した場合、大人たちの場合とは異なり、あっという間にその集団の中で乱用が伝染して行きます。ここに、薬物問題の怖さがあります。

1996年四月に、神奈川県藤沢地区の県立高校生が、神奈川県警に大麻取締法違反の容疑で逮捕されたことから始まった、神奈川県下の高校生たちの薬物乱用の摘発は、その後、横浜市、小田原市、横須賀市へと思いがけない広がりを見せ、新聞やテレビなどのマスコミにも大きく報道され、大きな社会問題となりました。学校内での薬物の売買、学校のトイレでの使用、修学旅行中の使用とさまざまなショッキングな実態が報道されました。その後、七月に神奈川県警より、一応の捜査終了宣言がだされましたが、数十人に及ぶ高校生たちが、鑑別所や少年院送致、保護観察等の指導を家庭裁判所で受けました。まさに今回の埼玉県的事件と同じ形態でした。

これも、最初は数人のグループが、夜の町で外国人の「売人」から興味半分に購入した覚せい剤と大麻すなわちマリファナの魔の手に捕まり、その購入資金を手に入れるために、自ら「売人」となり、夜の町で遊ぶ別なグループに密売を繰り返していった結果でした。この事件では、多くの高校生たちが県警の捜査対象となりました。しかし、現行の法律では、薬物使用、所持の現行犯か、薬物の密売を行なったものしか処罰できないため、逮捕者は数十人に留まりました。家庭裁判所に書類送検された高校生たちのほとんどが、単に薬物を乱用していただけでなく、それを友人に密売していたことを考えると、薬物を乱用していた高校生の数は、相当な数に及びます。

薬物は、二つの顔を持っています。一つの顔は微笑みかける天使の顔です。薬物は、どのような種類のものであっても、人間に確実に快樂をもたらします。他者や家族・社会は、私たちに裏切り、苦痛を与えることもあるけれど、薬物は、その初期の試用の段階では絶対に裏切りません。ある種の薬物は陶酔感を、ある種の薬物は多幸感や興奮をもたらしま

す。そのため、一度使用してしまうと、その誘惑を断ち切ることは困難です。

薬物の二つ目の顔は、無気味に笑う死神の顔です。薬物は、人間を確実に破滅へと導きます。社会からはじき出し、友人や愛する家族を奪うだけでなく、それを乱用する人間の人間性を破壊し、その存在を精神的にも肉体的にも死へと追いやります。薬物は、どのようなものも脳に直接作用して、快感をもたらします。でもこのドラッグの効果が切れるときには、強烈な不快感がおそってきます。そして、また使ってしまう。このくりかえしの中で、薬物なしではいけない状態すなわち依存症という病気になってしまいます。そして、テレビより薬物、ゲームより薬物、友だちより薬物、家族より薬物と、どんどんその魔の手に捕まっていき、最後には命より薬物ということになってしまいます。

しかも薬物は、人を三回殺します。最初に殺されるのは心です。意欲・気力・優しさ・友情・愛・思いやり・・・、人間にとってもっとも大切な心を殺されます。そして、二番目に殺されるのは頭です。ふだん人間は、同時にいろいろなことを考えることができます。しかし薬物を使い始めると、薬物のことしか考えられなくなります。「いつ使おうかな、どうやって手に入れようかな、どこで使おうかな、だれと使おうかな・・・」と、頭の中は薬物のことでいっぱいになってしまいます。そして、使いつづけると三つ目の最後の死、すなわちからだの死がやってきます。これが薬物の怖さです。

若さから自らを見失い、現在の繁栄の陰で、さまざまな寂しさから刹那的に生きる、今の多くの子どもたちにとって大切なものは、今この瞬間の快樂です。彼らのもとに薬物が入っていったらどうなるのでしょうか。彼らが簡単に薬物を手に入れることができるようになったらどうなるのでしょうか。家庭や学校で日々さまざまに抑圧されている彼らにとって、守るべきものはあまりにも少ないのです。彼らは、薬物の一つ目の顔にのみ目を向け、容易に薬物の乱用へと走っていくでしょう。薬物ほど、簡単に何の努力も必要とせず、瞬間の快樂を与えてくれるものはないのですから。

それでは、薬物について、もっと詳しく見ていきましょう。薬物というと、みなさんは、シンナーや覚せい剤、マリファナなどの大麻を思い浮かべるでしょう。しかし、薬物は、もっともっと種類も多く、みなさんの周りには出回っています。

一般的に薬物といった場合、「すべての依存性のある薬物」のことを意味します。たとえばガソリンもライターのガスも立派な薬物ですし、薬局で市販されるせき止めや風邪薬、痛み止めなどにも薬物と呼ばなければならないものがたくさん存在します。また、タバコやアルコールも、成人にはその使用が認められています。立派な薬物です。これらの薬物を乱用することは、法律で厳しく禁止されており、乱用すれば、厳しく罰せられます。また、乱用を繰り返せば、どのような薬物でも、それなしでは生きることのできない依存症となります。そして、乱用を繰り返し、死を迎えることとなってしまいます。

薬物は、その人間のからだや脳への作用から、大きく三つに分けることができます。それは、抑制系（ダウン系）、興奮系（アップ系）、幻覚系(サイケデリック系)の三つです。

抑制作用をもたらす薬物には、アルコール、麻薬系薬物、すなわちアヘン、モルヒネ、ヘロインなど、睡眠薬、シンナーなどの有機溶剤、ガスなどがあります。これらの抑制系の薬物は、それを乱用すると人間の感覚や思考、行動の機能を低下させ、鈍らせます。このことから、乱用者たちからは、英語を使ってダウン系とも言われています。また、痛

みを感じなくなったり、乱用初期には、多幸感や充足感、陶酔感をもたらします。

そのため、現実逃避の安易な手段として、現実の問題を抱えて、精神的にまいっている人ほど、この種の薬物に救いを求め、死への泥沼に入り込んでしまいます。

興奮系の薬物には、覚せい剤やコカイン、タバコなどが分類されます。この種の薬物は、その乱用によって、いわゆる「すきっとした感じ」や、高揚感、万能感をもたらします。眠気を抑え、不眠症状を作りだし、乱用初期には脳の働きも活発化します。このことから、この種の薬物は、アップー系と呼ばれることもあります。

幻覚系の薬物には、LSD、シンナー、マリファナ、ラブ薬物などと呼ばれている MDMA 通称エクスタシーやPCPなどが分類されます。これらの薬物は、脳の一部の機能を麻痺させ、感覚が鋭敏化し、様々な幻覚を乱用者にもたらします。しかし、脳への非常に強い作用を持ち、その乱用は、精神異常を引き起こします。

先日、私の学校に、地方から中学校2年生の息子を持つ父親が訪ねてきました。彼は、私と会うなり、「先生、見てください」といって、肩の部分を見せてくれました。彼の肩の少し下の部分は、見事に歯でかみ切られていました。彼が、「息子にやられました」とぼつりと言うのを聞いて、私が「LSD ですね」というと、彼は大きくうなずき、彼の息子が、音楽に興味を持ち、ライブハウスに出入りし、そしてそこで LSD に手を出し、現在精神錯乱状態であることを、語ってくれました。彼の息子は、その後、薬物関係の治療の専門病院に入院させましたが、結局は、精神病院で一生を過ごすことになりました。残念ながら、回復の見込みはありません。

これらの三つの分類は、あくまでもそれらの薬物の乱用初期の作用から分類したもので、大量の乱用、長期の継続的な乱用によっては、抑制系のヘロインが、幻覚を生み出したり、興奮系の覚せい剤が、幻覚作用を持ったりと、様々な複合的な作用をもたらします。

しかし、いずれの薬物にも共通するのは、私たちの大脳中枢に直接作用して、私たちの意志とは無関係にさまざまな状態を作り出すということです。

それは、多幸感や陶酔感であったり、万能感や幻覚であったりしますが、いずれにしても強烈な快感を伴う快体験であり、乱用した人の心の不安感や痛みを忘れさせてくれます。

ただし、それは最初だけで、後には死へのまっすぐな道があるだけです。

また、ほとんどの薬物は、耐性というやっかいな性質を持っています。それは、乱用者が、その薬物に慣れてしまうということです。つまり、乱用を繰り返していくと、それまでのように快体験を得るためには、さらに多くの薬物をさらに頻繁に乱用するしかなくなるのです。それとともに、薬物が切れた状態では、不安や不快感でたまらなくなります。こうして、薬物の乱用者は、薬物なしでは生きることができなくなります。これが、依存症の状態です。あらゆる薬物は、乱用すればこの依存症に陥ります。こうして、乱用者は、乱用を繰り返し、確実に廃人となるか、肉体的な死を迎えることとなります。

私たち専門家の間では、「1対3対3対3」ということばがよく使われます。すなわち、薬物を乱用した人の1割は死に、3割は刑務所か精神病院の檻の中、3割は行方不明、3割がなんとか私たちとともに薬物なしの生活を日々繰り返し社会復帰できるということです。このよう薬物は恐ろしいものです。だからこそ、学校での予防教育の徹底が強く求められているのです。

新たな問題行動との出会い

私は、13年前に横浜市の定時制高校に勤務して以来、「夜回り」で知り合った様々な問題行動を起こすあるいは起こした生徒たちや勤務する定時制高校での生徒の問題行動に、生徒指導担当の教員として、一人の教員としてまた一人の大人の人間として対応してきました。それらの問題行動は、万引き・窃盗・強盗から性非行・性犯罪、薬物乱用果ては殺人未遂まで多岐に及びました。しかし、それらの問題行動には触法行為あるいは犯罪という共通点がありました。私は、彼らを「夜の闇に沈む子どもたち」と呼んでいます。

彼らの更生には、まず彼ら自身がしてしまった問題行動がなぜ問題なのかを理解させ、そして犯した罪は償わせ、新たな生き方を共に生き合い、探していくという生徒指導が必要でした。根気のいる指導でしたが、彼らが明日を求め始め、昼の世界に戻る姿を見ることはこの上もない喜びであり幸せでした。決して楽な仕事ではなかったですが、楽しい仕事でした。

しかし、2年前私ははじめて新しいタイプの問題行動を起こす一人の高校2年生の少女と関わりました。その問題行動は、リストカットとOD(オーバードーズ:処方薬を一回の処方量を超えて過剰摂取すること)でした。彼女の両親は彼女が小学生の時に離婚し、父親は再婚、母親も再婚、彼女は姉と二人祖母に預けられ育ちました。

その状況の中で彼女は、姉からの暴力、学校でのいじめに小学校時代からさらされ、そして中学校時代からリストカットを始めました。それに気づいた祖母が心療内科に連れて行くと、今度は医師から処方された向精神薬を一度に数十錠も服用し、今のつらい状況から逃れようとしていました。そのような状況が何年か続き、死を考えていたそのときに私は彼女の学校で講演しました。その私の講演を聞き、私に最後の望みを託して相談してきました。私は、痛々しい彼女に対して、精神科医でもなくカウンセラーでもない一介の生徒指導の教員として何ができるのか、不安を抱えたまま彼女と生き始めました。毎日が試行錯誤の連続、インターネットや様々な出版物を通して、リストカットや心の病について研究しました。そして、その事実を昨年9月に一本の番組としてテレビで放映しました。さらに、今年の2月に一冊の本にまとめ出版しました。この番組や本は、心に様々な傷を持ち、苦しんでいる子どもたち、若者たちに、理解している、一緒に考えようとしている大人がまずは一人ここにいるよというメッセージを伝えるものでした。その結果は・・・。半年間で三万本を超える相談メール、とぎれることのない相談の電話でした。私の「夜、眠れない子どもたち」との出会いでした。

夜眠れない子どもたち

現在私たちの社会は、人を認め合う社会ではなく、人と人が責め合う社会、攻撃的な社会になっています。私たち教員ですら、仲間に対して、「あいつは、何をやってるんだ」、「そんなことでどうするんだ」と責め合い、生徒たちに対しても、「こんなことをしてどうする」、「そんな成績じゃどこにも進学できないぞ」と責め合うことが続いています。上司は部下に、部下は家庭で妻に、妻はその子どもに・・・。攻撃が下にしたにと続いて

きています。でも、子どもたちはだれを攻撃して鬱憤を晴らせばいいのでしょうか。同級生を殺すことで……。年下の子どもを殺すことで、動物や生き物を虐待することで鬱憤を晴らせばいいのでしょうか。すでにそうしている子どもたちもいます。そのように責められ攻撃されても、私たち大人は、家庭であるいは夜の町の仲間との一杯で気をまぎらわせ、また次の日を何とか過ごしています。しかし、大人たちのように息抜きやうつぶん晴らしをお金やお酒の力を借りることでできない子どもたちはどうしているのでしょうか。

長崎県佐世保市の哀しい事件のように同級生を殺すのでしょうか……。長崎市の事件のように年下の子どもを殺すのでしょうか。あるいは、仲間を虐めたり生き物を虐めることで鬱憤を晴らすのでしょうか。

私のもとに届いた三万通を超える相談のメールのほとんどすべてには、昼の世界、家庭や学校で自己の存在を否定され苦しみ、その中で非行や犯罪、あるいはリストカットなどの自傷、自殺願望へと追いやられている子どもたちの叫びが刻まれていました。私の2月からの日々は、これらのメールにひたすら生きて欲しいというメッセージを伝える日々でした。それらの一つひとつの相談に、あるケースは学校の先生への相談でつなぎ、あるケースは、心療内科に、あるケースは精神科に、またあるケースは児童相談所につないでいく日々でした。直接私が、関わることになったケースも数百を超えています。

今、この攻撃的な社会の中で、学校や家庭で日々批判され、自己肯定感や自信を失った子どもたちの中で、まだ生きる力を持っている子どもたちは、夜の町に出ます。彼らを評価せず否定する昼の世界に背を向けて、夜の町でたむろし、仲間を作り、そして非行集団や暴走族として大人たちに対峙してきます。彼らは一人では、大人に勝つことはできません。そのため集団を作ります。また、昼の世界に背を向けて夜の町に出てきたけれど、大人に対抗するほどの元気のない子どもたちは、暗がり集い夜を過ごしていきます。そんな中で、寂しさに埋もれそうな少女たちは、中高年の性の対象となり買春されています。そして、その偽りのふれあいの中に一時の救いを求め、実はさらに傷ついています。

しかし、家庭や学校で傷付けられた子どもたちの中で、そのような子どもたちより遙かに多くの純粋で優しい子どもたちは、自分を責めています。「私が、悪いから責められた」、「私なんかいないほうがいいんだ」、「もうみんなに迷惑はかけれない」……。すべての問題を自分で抱え込み、その重圧の中で、夜眠れず、そして一人夜の暗い部屋の中で苦しみ、自分を傷付け、あるいは市販の薬や処方薬をODして何とか生き抜いています。私の「夜、眠れない子どもたち」との出会いでした。現在の日本では、まずすべての中学校や高等学校にこの問題で苦しんでいる生徒がいます。親や教員が夜ぐっすりと眠っているときに、インターネットやメールで生きるための救いを求めながら、カミソリやカッターナイフを前にして、自分の手首を切ることで生き抜こうと苦しんでいる子どもたちがいます。明日、生きるために……。

そのような中で、リストカットなどの自傷行為を目にしたほとんどの親や教員、友達たちは、必ずと言っていいほど「止めなさい」、「なんでそんなことをするの」と言います。また、その行為を責めます。しかし、これは子どもを死に追い込むほどのひどい言葉だと私は思います。リストカットなどの自傷行為は、ほとんどのケースで、子どもたちの心の叫びです。子どもたちは、自分を傷付けることで、それまでに受けた心の傷から死へと向かう誘惑を何とか断ち切り生きています。これらの自傷行為を、無造作に止めてしまうこ

とは、その行為でかろうじて心のバランスをとって生き抜いている子どもを死に追い込むことになりかねません。

これらの心の病の問題について、それは生徒指導の問題ではない、養護教諭やスクールカウンセラーの問題だと言う人も多くいると思います。私は、この問題はすべての教員が、担任として生徒指導担当としてあるいは一人の教科指導担当として目を背けることなく関わらなくてはならない問題だと考えています。少なくともそこまで子どもたちを追い込んでしまったこの社会を作った加害者の一人の大人として人間として、きちんと向き合わなくてはならない問題だと考えています。

実は、このリストカットなどの自傷行為が初めて社会問題として取り上げられたのは、1950年代のアメリカにおいてです。第二次世界大戦後の繁栄を謳歌していたアメリカの、女子刑務所と精神医療機関の女子病棟でほぼ同時期に収監者や患者の間にリストカットが見られ、そして、リストカットが短期間に同じ房や同じ病室の収監者や患者の間に広まっていったという報告が出されています。

このことからわかる通り、リストカットなどの自傷行為は、物質的な繁栄の中で閉塞的な状況に置かれ、心の中に様々な葛藤をため込んでしまい、さらにその心の叫びを何らかの方法で外に出すことができない場合に、一つの心の叫びの表現として発生します。

今回の私へのリストカットについての相談は、約二万六千、その95パーセントは十代の女子でした。また5パーセントの男子のケースは重いケースが多く、一刻を争い対応しなくてはならないケースでした。これは、男子の場合、女子と比べ、我慢に我慢を重ね続けるため、リストカットが始まる時には、すでに一杯一杯で自殺を意識しながらリストカットをしているケースがほとんどでした。

また、部活動やクラスの仲良しグループが集団でリストカットをしているケースの相談も多く、中には、友人のリストカットを止めようとしているうちに、自分も始めてしまったというケースもありました。

① 自傷行為

自傷行為には、様々な形態があります。手首を鋭利な刃物で切るリストカットや上腕を切るアームカット、火のついたたばこを押しつける根性焼き、安全ピンなどでからだを突き刺すピアシング、広い意味では、ボディピアスもこの範疇に入ります。

私の元に、この半年ですでに小中高校生からのこの種の相談が二万件を超えて届いています。そのほぼ90%は女子からの相談です。また年齢的には17才からの相談が最も多く、相談の最低年齢は小学校4年生の男子生徒からのものでした。その具体的な学齢と性別の分類は以下の通りです。

資料1 自傷行為の学齢別・性別メール相談件数

学 齢	男 子	女 子	総 数
小学校 4 年	1	0	1
小学校 5	3	7	10

年			
小学校 6年	24	71	95
中学校 1年	81	786	867
中学校 2年	95	1359	1454
中学校 3年	319	3024	3343
高校 1年	247	3051	3298
高校 2年	492	6118	6610
高校 3年	526	4958	5484
総 数	1788	19374	21162

2004年2月10日より2004年8月31日

これを症状別に見ていくと、その99パーセントはリストカットであり、学校に通学できているケースでは、軽く手首に傷を付けている程度がそのほとんどですが、不登校や学校を辞めて引きこもりとなっている子どもの場合、血管まで死を意識して切っている重篤なケースが目立ちました。やはり、学校で多くの人たちに囲まれ、虐めや無視等の心の被害に遭っていても、人間に対して何らかの救いや接触を求めている場合は、まだ軽度ですむことが多いようです。また、他者に知られたくないという気持ちが多少の抑止力になっているようです。その一方で、不登校や引きこもりによって孤立してしまっている子どもたちは、孤立化の中で自己意識に閉じこもり、救いを死に求めさらに深く切っているケースが目立ちました。

私は、この問題にきちんと取り組むまでは、リストカットなどの自傷行為は、自殺願望の一つだと考えていました。しかし、今は違います。子どもたちは、生きるために切っているということに気づきました。親からの虐待や心ない扱い、学校でのいじめや人間関係のいざこざなどで、心がいっぱいになった子どもが、リストカットなどの自傷行為でその心にたまり込んだものをはき出しています。特にそれまでの人生で、人間関係を作ることが不得意な子どもほど、孤立し重篤になっていました。

学齢的には、やはり高校進学が一つの心への圧力として重くのしかかる中学校3年と、心の一番不安定な時期といわれる17才への時期高校2年での相談件数が多く見られました。

原因については、まだ正確な数値的 분류はすんでいませんが、主だって目立つ理由は以下の通りです。

- ア) 家庭における虐待
- イ) 学校におけるいじめ
- ウ) 過去における性的な被害
- エ) 親の過度な期待への適応疲れ
- オ) 失恋
- カ) 友人関係

特に、アからウの理由で自傷行為に入っているケースは、重いケースが目立ちました。また、男子の場合は、ほとんどの理由が、イのいじめでした。また、症状については、自傷行為をはじめて2〜6ヶ月は、ただ刃物の刃を軽く押しつけ傷跡を作ったり、たばこの火を肌の近くまで近づけて軽いやけどを作ったりと、軽微なものがほとんどでしたが、この期間にさらに追いつめられると深く切り始め、一度出血を見てしまうとさらに切り込むという悪循環に陥っているケースが多く見られました。ただ、血管まで切り裂く行為を常習的に繰り返すケースでは、すでに精神科領域に入っているケースがほとんどでした。このような非常に危険で重いケースは、小学生や中学生ではまったく見られず、特に17才以降、高校2年生以降に見られました。また、このケースの場合は、学校に在籍しているとしても、定時制高校や通信制高校に、しかも不登校、あるいは引きこもりとなっているケースがほとんどでした。

これらの自傷行為についての、教育現場でのあるべき対応については次回きちんと書きます。今回は、事例の紹介と分析にとどめます。

② OD(オーバードーズ)

ODとは、医師から処方された睡眠薬や向精神薬を指定された量以上に服用することや、一部の麻薬成分の入った市販薬を一度に数十錠と過剰に摂取することです。このODが、中高生の間に広まってきています。まずは市販薬のODについてから見ていきます。

実は、市販薬の一部には、微量ですが麻薬成分を薬効のために含むものがあります。エフェドリンや麻黄、コデインやアセトアミノフェンなどの成分が含まれている市販薬です。これらの市販薬を数十錠単位で一度に服用するとそれぞれの成分に応じて、禁止薬物であるヘロインや覚せい剤を乱用したのと同様の抑制効果や覚醒効果を得ることができます。かつて、ブロンという名前で市販されていた咳止めを一部の高校生や大学生が乱用し、精神障害を引き起こし社会問題になったことを憶えているかたも多いと思います。その後この商品は、その中に含まれている麻薬成分を減らしました。しかし、その他にも数多くの危険な市販薬が、薬局で販売されています。本来これらの危険な市販薬は、対面販売が義務づけられ大量に一人の客に販売することはしないように指導されていますが、一部の大きな店舗や心ない薬局では、一度に十箱二十箱とこれらの市販薬を販売しているケースもありますし、また乱用者の中には、いくつかの薬局を回り買い貯めているケースもあります。

昨年私の元に一人の中学校一年生の少女から相談の電話が来ました。この少女は、小学校5年から生理が始まり、その生理痛が重いことから母親が自分が使っていた痛み止めの市販薬を与えました。小学校6年生の時に学校で嫌なことがあり、家でも母親から叱られ、母親からこの痛み止めは危険だから決まった量以上に飲んでほめだといわれていたことを思いだし、死のうと十数錠を服用しました。ところが、死ぬどころかふわっとした軽い気分になり心が楽になったそうです。それからは、何かあるたびに乱用を繰り返し、私のところに相談に来た時には、週に一度は数十錠を乱用していました。そして、完全に薬物依存が形成されていました。

これらの市販薬乱用については、インターネットで「気持ちの良くなる薬の使い方」な

どのさまざまな形で紹介されており、一部の高校生たちの間で広まっています。私のところへの相談は、受験校の男子生徒からの相談が多く、受験への不安を解消するために乱用し、苦しんでいるケースが目立ちます。

一方、医師から処方された睡眠薬や向精神薬を指定された量以上に服用する本来の意味での OD のケースは、重いケースがほとんどです。学校へ行こうとすると何らかの身体症状が出てしまうパニック障害や精神的に不安定になったり、自傷行為を繰り返すことから、心療内科や神経科、精神科に通院し、そこで処方されている処方薬を、もっと服用すればさらに楽になるのではと一回分の量を超えて服用している間に依存形成してしまい、それらの処方薬を常に大量に服用しないと、精神的な安定がはかれず、眠ることもできなくなっているケースが目立ちます。

私の元への相談では、高校 2 年生の不登校の女子生徒が、数件の精神科の病院を回り、処方薬を集め、毎日数十錠をアルコールとともに服用し、それらの処方薬が切れると自殺未遂を繰り返していたケースもあります。この少女は、現在精神科の病院に入院し薬物からの離脱を試みっていますが、前途は多難です。

処方薬は市販薬とは、麻薬成分の含有量がまったく異なります。私たち薬物の専門家の間でも、この処方薬乱用は、治療が難しく最もやっかいな後遺症を残す可能性のある危険な行為として考えられています。肝臓や脳に大きなダメージを与え、治癒することのない障害を残します。また、これらの処方薬の乱用は、それ自体が、「麻薬及び向精神薬取締法」に違反する犯罪行為です。

③ 不登校・引きこもり

文部科学省の 2005 年の発表では、全国に 13 万 1000 人の不登校の児童・生徒がいます。まず、みなさんの学校を見ても、一人の不登校の生徒も存在しない学校を探すことは困難でしょう。また、厚生労働省の発表では、今日本に約 30 万人の引きこもりの人がいるとされています。これについては、異論もあり、民間機関の推定で 100 万人以上、あるいは 200 万人近いという発表もあります。この、不登校・引きこもりの問題は、今後日本の大きな社会問題となっていくでしょう。これは、ただ単に社会資本としての労働人口が減り、日本の経済に大きな影響を与えるということだけではなく、もっと大きな社会問題化するだろうと私は考えています。人は、社会的な動物です。何らかの社会に属し、人と人との関係性の中で自分を確認し明日を拓いていきます。その所属する社会を失ってしまうことは、その当事者にとって非常に不安であり、心を不安定にします。その結果、心を病み、自殺に走ったり犯罪に走る人が増えてしまうのではないかと危惧しています。佐渡の少女拉致・監禁事件、新潟県柏崎の少女誘拐事件、兵庫県での親族 7 人殺傷事件、いずれも引きこもりやその傾向を持った人の犯行でした。速やかにこの問題に、私たち教育の分野だけでなく関係機関全体で取り組まないと大変なことになる、私は確信しています。

この問題について、怠学からくる不登校については、生徒指導の問題として取り組む必要があるだろうが、それ以外の理由の場合、生徒指導の問題なのかと考える先生方も多いと思います。しかし、不登校や引きこもりには必ず原因があります。家庭での親からの虐待、過剰関与……。あるいは学校でのいじめ、教員との不適応……。様々です。私は、

それらの問題解決も生徒指導の仕事だと考えています。ただ、不登校・引きこもりの原因が、潔癖症やパニック障害など生徒自身の神経症に起因している場合は、当然ながら心療内科や神経科、精神科の専門家による治療と指導を最優先に対応する必要があります。また、他の生徒との関係や教員との葛藤などが原因として考えられるケースでは、その問題解決の中心に立ち、状況によっては他校への転校やフリースクールなどとの連携をはかる必要もあります。特に、その原因が家庭内にある場合は、それが虐待などの場合は児童相談所に通報し生徒を守ることが必要です。そこまでいかないケースでも、親と生徒の間に立ちながら、その問題の解決に当たる必要があります。

いずれにしても、不登校や引きこもりの生徒と関わる場合、私たち教員はその生徒本人への様々なアプローチを通して、問題解決を図ろうとします。しかし、私の経験から、これでは不十分ですし、ケースによっては悪い状況を作り出してしまうことすらあります。不登校や引きこもりで第一に苦しんでいるのは、当然当事者である本人ですが、家族特に母親も同じように苦しんでいます。その苦しみの中で母親やその他の家族の本人への対応も、ある時は優しく、ある時は厳しくと混乱し、本人に不安感や失望を生じさせ、さらに本人を追い込んでしまうケースが多く見られます。さらには、この問題から家族がバラバラになってしまったり、母親が心を病んでしまうケースも見られます。この家族、特に母親をいかに孤立させずサポートしていくかも、これからのこの問題の解決に当たって、生徒指導担当教員に求められていると私は考えています。まずは、不登校の子どもを持つ親の会や各地にすでに開設されている不登校の子どもたちと関わっている自助グループ等と連携して、同じ問題を抱える親たちやその問題を克服した親たちとの交流の糸口を作る、さらには、定期的に親に連絡し学校がきちんと生徒のことを心配していることを伝え、親を孤立化させないことなど、多くのアプローチができます。

まずは、みなさんのそれぞれの地域のこの問題についての施設や相談所を調べ、連携しておくことが重要です。

④ 摂食障害

摂食障害とは、何らかの理由から食べることを止めてしまう拒食やその反対に過度に食べ続ける過食、あるいは食べるだけ食べてそしてそれを吐くことを繰り返す過食嘔吐に入っているケースをさします。すべてのケースが生命の維持に直接関わる、この種の問題の中でも非常に危険な問題です。この摂食障害はほとんどの場合女子に現れます。生徒が、急激にやせていったり、その逆に急激に太ったりする場合は、注意する必要があります。このケースでは、不登校を伴うことも多いため、不登校生徒の家庭に連絡する場合は、体重の変化について確認することで発見する糸口とできます。

単純なケースの摂食障害としては、痩身願望から拒食になりそれが習慣性を持ってしまいうケースがあります。私の元にも数は少ないですがいくつか相談が来ています。このケースの場合、親や教員は、手を変え品を変え何かを食べさせようとしています。しかし、拒食も習慣性を持てば拒食症という立派な病気です。きちんとした精神科医の力を借りて対応する必要があります。特にこのケースでは、心療内科の対応が非常に有効です。本人や家族にとっても、神経科や精神科へ通うことと比べ抵抗感が少ないです。

しかし、私の元に来た数千の摂食障害についての相談のほとんどは、過去におけるいじめや虐待、暴行や強姦など何らかの心理的な要因から来ているものでした。このケースは、初めから摂食障害になるということはほとんどなく、その前に、不登校や引きこもり、リストカットやODなどの症状が続き、その結果として摂食障害になっているケースがほとんどでした。どのケースも生命の維持に関わる重篤なケースが多く、精神科医へ紹介していきましました。また、その原因が家庭の虐待にある場合は、児童相談所に通報、学校でのいじめ等にある場合は、その学校に連絡をしてその問題解決に動きました。父親からの性的虐待や過去の暴行や強姦に原因があるケースでは、各都道府県警の女性性被害対策室と連携し、対応しました。

摂食障害の生徒のケースでもう一つ注意しなくてはならないのは、生徒が薬物を乱用しているケースです。薬物特に覚せい剤は、その乱用が二つの身体症状をもたらします。一つは瞳孔数時間にわたって開いてしまうこと、もう一つは胃が数日にわたって収縮してしまうことです。この覚せい剤の乱用を続けると、拒食症状が発現します。そして急速にやせていきます。しかし、覚せい剤の乱用を止めると、その反動で過食症状が現れます。そして、過食により体重が急激に増えていきます。それを気にする一部の生徒は、食べては吐きという過食嘔吐を繰り返すようになります。そして、また痩せていきます。このケースでは、必ず薬物治療の専門医による介入が必要です。しかも入院まで含めた総合的な治療なしに対応することは困難です。

いずれにしても、この摂食障害に対しては、精神科医の助けなしに対応することは危険です。日常から地域で相談できる精神科医を見つけ連携しておくことが大切です。

⑤ 自殺願望

今青少年の自殺が大きな社会問題となっています。家庭問題・学校でのいじめなどを原因として尊い命を絶つ青少年が増加しています。しかし、それとは別に自殺願望を語る青少年が急増しています。

私の元にこの2月から届いた約4万通の相談メールの中にも、1万通を超える「死にたい」、「死にます」、「私なんか生きていても仕方がない・・・」といった自殺願望を書いたメールが届いています。これらのメールに共通しているのは、親や教員、大人に対する不信感と孤独感、その中から死を考えながらも救いを求める切ない想いです。このケースの子どもたちは、「死に向かおうとしている子どもたち」と呼べばわかりやすいと思います。これらの子どもたちの一部が、インターネットなどの自殺系サイトに入り込み、この願望を強くしてしまい死に至るケースも発生しています。

これらの子どもたちに共通しているのは、「夜眠れない」と、意識が外に向かず常に自分の過去や今に向いてしまっているということです。昼間は、親や学校へのあるいは友人に無理をして何とか落ち着いた顔を作り、それが夜爆発し、そのいらいらや辛さの中で、夜眠ることができないまま死を意識し考えるという悪循環に入っています。このケースでは、教員による日常の生徒への声かけが効果的です。君を心配している大人がいることをきちんと日々伝えていくことで、大きな問題となる前に相談を受けることができます。そして、相談を受けたならそのケースによって、前に書いたように他機関や専門家と連携しながら

対応していくことが重要です。

(2005年4月 生徒指導教員用に書いた論文を改編)